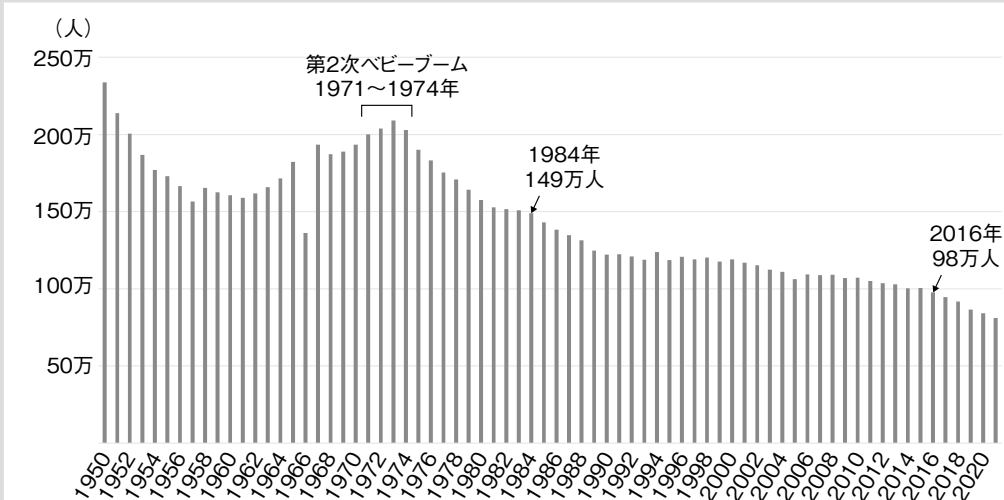


出生数の変遷



年頭の記者会計で岸田文雄首相は「異次元の少子化対策に挑戦する」と述べた。国はこの問題に強い危機感を抱いている。しかし日本の少子化は最近始まった話ではない。第1次ベビーブーム（1947～1949年）に最高約270万人であった出生数は、第2次ベビーブーム（1971～1974年）を境に1970年代後半から緩やかに減少を続け、1984年に150万人を、2016年には100万人を割った。要因として晩婚化・未婚化が挙げられる一方、格差が進み、共働きがあたり前の社会にあって、育児支援の制度が追いついていない、制度を活用できていないという指摘もある。2020年からのコロナ禍で婚姻数自体も激減しており、2022年の出生数は初めて80万人を割るという。この4月には「こども家庭庁」も設置される。数十年越しの課題に、われわれはどう向き合うべきだろうか。

厚生労働省「人口動態統計」より作図